

活力あふれる古里目指して！

長野県木曾町 がったぼ会

がったぼ会事務局長 大目 富美雄

はじめに

少子高齢化等による過疎化の進行で人口が減り続ける古里。そんな自分の古里を少しでも良くしたい。もっと楽しく住み良いところになりたい。自分たちが古里に対して誇りと自信を持って生活することが、将来子どもたちが古里へ帰って来ることにつながるのではないか。

古里を良くするために今、何をなすべきか。大切なのは机上の空論よりも、まず実践すること。できない理由を並べる前に、まず小さなことでもできることから始めてみよう。金がなければ知恵を出し、汗をかこう。とにかく始めよう、一歩を踏み出そう！

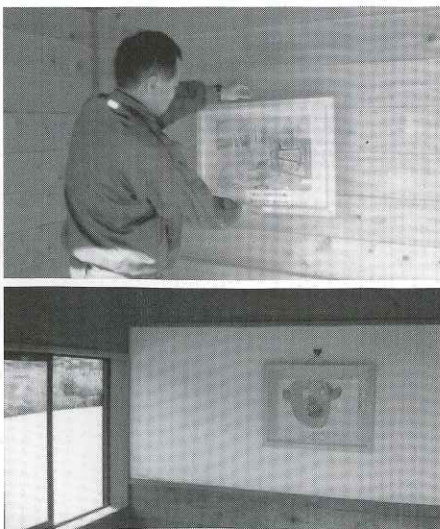
そんなみんなの思いから「がったぼ会」の活動がスタートし、早30年余りになる。地元の青年会OBやイターン者などを中心に15名余りのメンバーで本当に様々な取り組みを行ってきた。ちなみに「がったぼ」とは、地元の方言で元気のいい男の子の意。活動も活発に元気良く行おうという気持ちが込められている。

子どもたちとの共同事業

地域づくり活動は、自分たちのほか地域の人たちを巻き込んで一緒に行うのが理想だ。特に子どもたちと一緒にやると活動そのものが大いに盛り上がる。



○子どもたちの絵を飾るバス停美術館
バスの停留所の室内壁には、交通安全や指名手配など行政関係のポスターが掲示されていることが多い。そして、なんとなく寂しい雰囲気が漂っている。



バス停美術館



子ども写真コンテスト



中学生が「いわな天井」のCMで大賞を受賞

そこで平成21年、子どもたちの絵をバス停に飾る「バス停美術館」事業を始めた。絵は直接画鋏で板壁にとめるのではなく、額縁に入れることにした。その額縁は既製品の方がはるかに安いのだが、少しでも地元林業や木工業の活性化につながれば、と木曾ヒノキの間伐材で作った。

現在も地元小・中学校の児童や生徒の絵画を入れ替えしながら、開田高原内のバス停20カ所余りに展示し、バス利用者に大変喜ばれている。

○小・中学生対象の子ども写真コンテスト

ふるさとの素晴らしさや魅力をもっと知ってほしい、と子ども写真コンテストを

な天井」を食べる会を行った。この会にはメンバーのほか小・中学校の先生なども参加。その中に毎年、A BN（長野朝日放送）で募集していたCM作りに生徒と一緒に取り組んでいる先生がいたことがきっかけになり、「いわな天井」をテーマに作品作りを行うことになった。会では早速マイク

平成21年から3回実施した。対象者は小・中学生で、郡内の自然風景や街並み、お祭りなどを題材として行い、毎回130点前後の応募があった。入賞作品は公民館や温泉施設などにパネルで展示し、多くの住民に観ていただいた。

入賞者には賞状と記念品などを贈呈したほか、上位入賞者の作品はポストカードにして応募者全員に参加賞としてプレゼントした。

○中学生が「いわな天井」のCMで大賞の快挙

とうじそばなど郷土料理を食べながらの交流会を毎年数回実施しているが平成23年、地元の温泉施設で出されていた「いわ

ロバスを手配、生徒には実際に「いわな天井」を味わってイメージをふくらませてもらった。

数カ月後に作品が完成し見事に予選を通過した。そして、本番ではなんと最高位のふるさとCM大賞を受賞する快挙を成し遂げた。生徒らが熱演した約30秒のCMは県内で1年間毎日放送され、そのうち50回は全国向けに流された。開田高原や温泉施設、いわな料理を広く県内外にPRすることができた。

美しい景観づくり事業

御嶽山麓に位置し豊かな自然と美しい景観に恵まれた木曾町開田高原は昭和47年に開発基本条例を制定し、日本で最も美しい村連合にもいち早く加盟を認められ官民一体になって景観づくり事業が進められている。そういう中で自分たちも自分たちでできる景観づくりの取り組みを実施している。

○沿道景観整備

国道361号ののり面や土手など1.5キロ余りにわたり会発足以来毎年2回、景観整備を行っている。7月下旬には主に刈り払い機を使って草刈りを行い、11月下旬には



国道361号沿いの景観整備



水車小屋をみんなの力で復元

歩道にまで伸びている木の枝や障害木の伐採などを行い美しい景観維持に努めている。

○歩道景観クリーンプロジェクト

美しい景観を損ねているものの一つが、車道に併設している歩道に生える雑草である。車に乗っていると気づかないが、歩いてみるとよく分かる。これを何とかしたい、とがったば会などが中心になり歩道景観クリンプロジェクトを立ち上げた。

現在、20名余りで約4キロの歩道の草取りやゴミ拾いを実施している。担当区間は一人80メートルから400メートルと、それぞれ決めてある。

作業は全員で日を決めて一緒に行うので

はなく、それぞれが都合のいい日に、自分のできる時間だけ行うというもの。

○水車小屋を復元

開田小学校横の水車小屋が老朽化し、景観上も良くない状況にあった。学校もPTAも町も予算がなく修繕でき

ないため、同じように地域づくり活動を行っている開田高原倶楽部に協力する形で自分たちが補助金なども活用しながら整備することになった。

会員をはじめ学校の先生方、地域の皆さんにも協力いただいて屋根、壁、水車などを修繕し、立派な水車小屋が復元された。その後、カメラで写真を撮る観光客の姿も見受けられるようになった。

交流による地域づくり、人づくり事業

○全国まちづくり交流会の開催

全国各地で自主的、主体的に地域づくり

を行っている団体や個人が一堂に会して研修と交流を深める全国まちづくり交流会。15回目の昨年は9月に富山市で行われたが、第9回大会は長野県で初めて木曾町開田高原で実施。がったば会が中心になり企画、運営を行い全国から170名余りの仲間が集まった。2泊3日の行程で「地場産品を生かした地域づくり」をテーマに意見交換と交流を行い有意義な大会になった。

このときにスタッフのユニフォームと土産品を兼ねて木曾馬と御嶽山をデザインしたオリジナルTシャツを作った。200枚以上販売し、売り上げの一部(12万2千円)を東日本大震災の被災地へ義援金として届けた。

まちづくり交流会は、その後も鹿児島県与論町や北海道蘭越町等を会場に行われ、毎回6名程度積極的に参加している。

○馬頭琴コンサート

今までジャズコンサートなどを開催してきたが3年ほど前には木曾馬の頭の形をしたモンゴルの民族楽器「馬頭琴」のコンサートをを行った。

開田高原は木曾馬のふるさとで50頭余りが飼育されており、そのルーツはモンゴルだといわれている。小柄で性格がおとなし

いのが木曾馬の特徴で、地元小学校の子どもたちも田起こしや運動会などを通じて交流を深めている。また、小学校の国語の教科書には「スーホの白い馬」（馬頭琴の話）が掲載されている。このように木曾馬と馬頭琴は深いつながりがある。コンサートでは、馬頭琴の独特の音色が多くの住民や子どもたちに大変好評であった。

○地域の食文化を生かした交流会

御嶽山麓の木曾町開田高原には、そばやすんきなど独特の郷土食がたくさん存在する。特にかぶ菜を塩を使わず乳酸菌発酵させた漬物「すんき」は、県の味の文化財



馬頭琴コンサートでは参加者全員がモンゴルの踊りで交流

にも指定され健康食ブームの中で近年、とりわけ注目されている。

食べ方は、みそ汁の具にしたり鰹節をかけて酒の肴にしたりするほか、最近ではチャーハンにしたりおやきに入れたり、餃子に使ったりとその調理方法も多様になってきている。

そこで昨年は「すんき料理を味わう会」を開催。食堂や道の駅、農産物加工場などから様々なすんき料理を一堂に集め地酒とともに味わった。今後は、さらに内容を充実させ町外からもお客さんと呼べるような一大イベントにしていきたいと考えている。

○都市との交流事業

かつて新宿にある居酒屋「浪漫亭」でふるさと交流会を開催。木曾の地酒、ビール、ワインをはじめトウモロコシ、岩魚の燻製、白菜のカルパッチョ、天然酵母パン、虹鱈の卵の花漬け、手打ちそばなどを持ち込み都市の皆さんと交流。親睦を図りながら木曾の素晴らしさや魅力をPRした。

また、昨年度は秋に千代田区の飲食店を借りて地元のおばちゃんたちと一緒に上京し、そのお店で調理を行い首都圏の皆さんに郷土料理を味わっていただく「木曾スローフード交流会」を開催。観光客の入り

込みを目指し、地域の魅力を大いにPRすることができた。

○イターン者フォーラムの開催

人口減少が大きな地域の課題になっている中で、開田高原においては他地域に比べ県外からの移住者（イターン者）が大勢いる。そこで今年2月、実際に住まわれている皆さんから移住の動機や課題、仕事や住宅などについて率直な意見を聴き、これからの移住者対策に生かそうと実施。これからも継続して行い、よそからの目線で地域の魅力を再発見する機会にしたいと考えている。

終わりに

地域づくりには「遊び心」がとても重要だと思う。そして、活動そのものが楽しくなければ長続きはしない。

みんなが楽しく元気に活動していれば、その地域が元気になり、結果的にその町や村が活性化するのではないかと思う。

今後も県内外の皆さんと交流を深め研鑽を積みながら、さらに活発な取り組みを行い古里をもっと元気に、もっと魅力的な地域にしていきたいと思う。